

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：32672

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01742

研究課題名（和文）現象学的スポーツ人類学研究の開発

研究課題名（英文）The Development of Phenomenological Sport Anthropology Research

研究代表者

石井 隆憲（ISHII, TAKANORI）

日本体育大学・スポーツマネジメント学部・教授

研究者番号：70184463

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は現象学的スポーツ人類学の研究方法を構築しながら、ミャンマーの民族スポーツである「チンロン」を対象とした民族誌を作成することが目的であった。そのために本研究と関連する視点を持つ従来の研究をレビューし、本研究に利用できる部分を抽出した。その後、実際に研究者自身も身体を動かしながらチンロンを実践し、私の身体感覚や身体認識を言語化した。このデータに基づいてチンロンの競技者や指導者たちとディスカッションをおこない、一定の合意を得ることができた動きの感覚の記述をテキストとして、これに解釈を加え民族誌を作成した。また、この手順をスポーツ人類学の現象学的研究の一つのモデルとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、いわゆる調査者の実践を通して、これまで主観的なものとされてきた私の身体感覚や身体認識を他者とのディスカッションを通して、客観的なものとして記述することにある。このような研究方法を提示することで、スポーツ人類学の研究に新たな視点と方法を提供するものである。

また、社会的意義としては、実際にスポーツを指導するにあたり、自分自身の感覚を含めた指導の方法を開発できるとともに、スポーツを通して共感する作用や同じように身体を動かすことでの身体的な理解の高まりについて理論的な背景を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to create an ethnography of Chinlone, an ethnic sport in Myanmar, while constructing a research method of phenomenological sports anthropology. For this purpose, previous studies with perspectives relevant to this study were reviewed and the parts that could be used in this study were extracted. After that, the researcher himself actually practiced Chinlone while moving his body, and verbalized my body sensations and body perceptions. Based on this data, discussions were held with Chinlone competitors and instructors, and an ethnography was created by using the descriptions of the sensations of movement that were agreed upon as the text and interpreting them. I also used this procedure as a model for phenomenological research in sports anthropology.

研究分野：スポーツ人類学

キーワード：チンロン ミャンマー スポーツ人類学 現象学的研究 身体認識 身体感覚 動き方の配列 実践

1. 研究開始当初の背景

従来のスポーツ人類学研究では、この学問の中核となる民族スポーツの技術や身体技法、あるいは民族スポーツの民族的知識(エスノサイエンス)の研究を言語や観察による「表象主義的な立場」からのみ進めてきた。しかし、こうした表象主義的な研究では、身体化された技術を明らかにすることはできないとして、直截経験(身をもって知るフィールドワーク)による現象学的な人類学研究の可能性が検討されてきた。

本研究では、現象学的人類学を研究者自身の身体を測定機器としながら、対象となる他者と間主観的な共同性を客観的な世界の手がかりとしつつ、これを資料及び解釈の枠組みとして活用していくという方法に基づく人類学である、と定義する。しかし、実際には現象学的人類学研究と言っても、定まった定義や方法が存在しているわけではなく、また、現在でも開発が続けられている研究領域である。そうした意味では、あくまでも一つの方法論を提出する試みでもある。

2. 研究の目的

本研究は民族スポーツの調査において、なかなか表面に浮上しない身体認識や身体感覚について、調査者自身の経験と身体感覚を一つのよりどころにしながら、現象学的な研究として、その言語化を試み、これを一つの資料としながら実践者の立場から解釈をおこなうものである。具体的には、研究対象をミャンマーの伝統スポーツである「チンロン」に定め、この実践者たちが感じてきた内面の世界の言語化を通して、ここに解釈を加えた民族誌を作成するとともに、暫定的ではあるが、このような現象学的研究の方法論を開発することを目的とする。

3. 研究の方法

研究の方法としては、調査者自身が研究対象となるチンロンを長期間実践してきた直截経験に基づきながら研究を深めることのできる現象学的な人類学の研究方法を開発しながら、民族スポーツの身体技法や身体認識、身体感覚をも含めた民族的知識や固有の知識(indigenous knowledge)を取り扱ったチンロンの民族誌(経験的調査手法による具体的記述)を作り上げるために、次のような手続きを取った。なお、ここに示した方法論の概略は本研究によって得られたものである。

(1) 調査者がミャンマーにおいて経験しているチンロンの動きを含めた全体の概略を言語化する。

(2) その前提として、おおむね中級者以上の実力、もしくは経験を有しているとチンロン世界から認められていることを条件とする。

(3) チンロンの世界において用いられているターム(意味ある言葉)を抽出し、それを一般的に理解できるように言語化する。

(4) 技の個別の動きを身体認識や身体感覚を含めた形で言語化する。ここでは内的意識に焦点が当てられることになる。この意識の中には意識作用と意識内容があると言われるが、本研究においては、中級者以上の認識を取り扱うことで、時間経過の中で変化する意識が、ある程度安定し、様々な感覚として安定的に意識できるもの(キネステーズ)を言語として抽出することにある。

(5) その言語化されたものを実践者たちとの間で検討し、共有される認識と身体感覚の動きを原意識として捉え、これを実践者たちが感じる動きの感覚と理解する。もちろん、動きそのものは一回性であり、一回一回において生成されるものであるから、一つとして同じ感覚は発生しないことになるが、私たちは運動課題が達成された場合、この感覚を手掛かりとして、もう一度行う動きとの違いを感じ取るよりも、共通する感覚そのものを知覚し、その感覚の発生を再生産することで運動行為の再現を行おうとするため、その変化していないと感じられる感覚を抽出することになる。(運動課題が達成できずにいた場合には、失敗した時の感覚とは異なる感覚が生まれるように体の動きやタイミングを変化させることになる。)

(6) このような手順によって抽出された原意識を基礎データとして、これに解釈を加えると共に、スポーツ学などの知見を補完することで一つの民族誌の作成を目指す。

4. 研究成果

本研究の詳細については、現在、民族誌を執筆中であり、何らかの形で世に問う予定である。また、ビルマ語においても簡易的なものを作成したが、クーデター後のミャンマー国内が非常事態宣言下にあるためにミャンマーに渡航することもできず、現地において出版ができない状況にある。

以下に、ここでは身体認識や身体感覚を含む民族誌的記述の一例を示す。事例として、マンガラーカンチービャーの動きを取り上げながら、動きについての民族誌的記述について例示する。なお、以下の文章の中でチンロンと示されているのは、チンロンという運動形態の総称ではなく、チンロンボールのことを意味している。

《マンダラー カン チービャーの動き方についての民族誌的記述》

最初に指導者が見せるマンダラー カン チービャーの動きの見本は、運動目標が「どのような課題をもつ運動なのか」、「どのような形態(ゲシュタルト)なのか」を知らせる働きをもつ。つまり、運動目標の動きの構造と動きの体系(どのような動きから発展して、どのような動きの構造をもつのか)を理解させるものとなっている。



【実践者の動きの感覚】

右足でチンロンを蹴ることになるマンダラー カン チービャーは、飛んできたチンロンに対して腰を落として左膝を曲げてキャッチするように当てる。マンダラー カン チービャーはカーチン(腰の高さのボール)であることから、飛んできたボールの高さも重要であり、高かったり、低かったりすると、この技で蹴ることは難しい。そのため飛んできたチンロンを見ながら、この技が使えるのかの判断を一瞬のうちにおこなう。マンダラー カン チービャーでの蹴りが可能だと判断すると、飛んできたチンロンに対面するように身体を移動させる。チンロンが飛んできて左膝にあたる流れに合わせるように膝を曲げながら身体を沈めて、チンロンを受け止める感覚で左膝を曲げる。例えば、チンロンが速かったり、高かったりすれば左膝を深く曲げる。左膝に当たったチンロンはそれまでの速度を落として、一瞬、止まるような感じで浮き上がる。それはどのような速度であっても、膝でのキャッチのタイミングが合うと、チンロンの速度が制御され、常に同じような弾み方をし、チンロンを蹴る者からするとチンロンがスローモーションで動くように感じながら弾むという経験をする。

右足については、チンロンが左膝に当たる瞬間に、もう一方の右足を、チンロンを中心として、その周りを回すように動かすことになる。つまり、片足立になった左膝の上にチンロンが当たっている瞬間に、すでにもういっぽうの右足は上部からチンロンを中心として、半円形を描くための準備ができあがっており、左膝にチンロンが当たった時には右足はすでに上がっており、左側へと動かすのである。足がクロスして立ち足である左足を、空中にある右足がチンロンを越えたときに、チンロンは左膝の中心よりも内側に当たって、軽く弾み地面に落ちようとする。チンロンが地面に落ちる前にチンロンを超えた右足、つまり、空中にある右足をまっすぐに地面に戻して、落ちてきたチンロンを足首を固定してつま先だけで上に向かせるようにして爪先で蹴り上げる。

【運動課題の遂行】

ただし、マンダラー カン チービャーでチンロンを蹴るに際しては、運動課題が解決されることが優先されるため、指導者とまったく同じ動きの形(コピー)が要求されるわけではない。技としての条件を整えることになる動きの条件が満たされていけば良いので、私の動き方を導き出させることを意識させることになる。運動経過は一回性の発生と原理に支配されているため、二度と完全に同じ運動経過を見ることは出来ないため、マンダラー カン チービャーの場合も飛んできたチンロンに毎回うまくタイミングを合わせて、左膝でキャッチするような意識をもつように言われる。マンダラー カン チービャーという同一課題に対して、その時々多くの解決方法が現れてくるが、その都度、指導者は何が悪かったのか、そして何が良かったのかのポイントを言葉によって、学習者に伝える。スタイルが多少乱れていても、それ以上に運動課題を成し遂げるといふ大枠の問題解決が要求される。

【型練習の意味と方法】

上記の問題を克服するために、チンロンでは「型」の練習が導入され、それに多くの時間が割かれる。ここでは「技をおしえる」のではなく、「動きを教えている」わけである。つまり、運動をする者は、運動メロディー(運動ゲシュタルトの時間経過)と動き方のコツ(時間経過の中で認識される動きの中心的な核と初めての成功体験ないしは成功体験の集積)を身体に刻み込むための練習として「型」練習がおこなわれるのである。

そして、この型練習の場面でマンダラー カン チービャーの場合には動きに合わせて「ロップ

ウンチョ ティアウンカッ」という注意が与えられる。これは蹴り足となる右足がチンロンを中心に回っているときには、「触れないように超えて」と言い、チンロンが左膝に当たって、地面に落ちるときに「当たるように蹴る」と指示される。もちろん、ここでは型練習なので、チンロンが飛んでくることをイメージしながら、この言葉が使われている。こうした型の練習を続けていくことで、動きの意味を理解することが出来るようになる。また、「触れないように超えて」という右足の動きの意味は、チンロンを中心として、その周りを回るというイメージ・スキーマ表現であり、型の練習を通して、イメージ・スキーマ表示を、動きを通して理解していくことになる。こうした理解は、自得という側面を持っており、それは私自身の動きに対する解釈が指導者によって与えられ、それを実際の動きの体験に接続させていることを意味している(動き方の意味構造の生成が、個人の感覚世界に対して大きな働きを促すことになる)。

動きの構造を知ることによって、マンダラー カン チービャーの「わざ」の知識ではなく、まさに今ここで起こっている動きのメタモルフォーゼしていく状態を、学習者自身が感覚的に意識できることにつながってくる。これによって、指導者の「動きを見る目」ができあがってくる。(「できる」と感じられる意識は、過去の運動経験やこの型の練習、あるいはこの後におこなう実際のチンロンを蹴る練習によって、「動ける身体」のキネステーズ志向性による運動メロディーを奏でるようになる。)

実際にチンロンを蹴る練習に入ると、身体の動かし方を制御するための「力動的表現」が使用される。この動きの図形的足跡に対して、例えば「腕をまっすぐに」とか、「あたりを弱く」、「触れないように」、「素早く」、「そこで蹴る」といった表現が、動き方の特定局面によって使われることになる。これによって型練習で発生した運動メロディーが、実際にチンロンを蹴る場面の、例えば「タイミング」とか、「呼吸の感覚」、「足の動かし方のスピード」などから実践的な運動メロディーに形態的円環運動の中で跳躍的变化を見せることになる。(しかし、こうした動きは、もっと経済的で合理的な動きへと変化する可能性を常に持ち合わせており、実際に上手く出来た動きのメロディーに修正されていく。)

【型練習による共振】

こうした過程の中でマンダラー カン チービャーの運動感覚が発生することで、指導者が見せる手本は、それを学ぶ者の身体を共振させ(学んでいく者からの積極的関与が大きな位置を占める)、指導者の身体感覚が運動する者への身体へと流れ込む。これは利き足でない足での練習の場合にも発生するもので、学習者が例えば右足が利き足である場合に、左足の練習をしつつも、しばしば、その感覚を転移させるために、利き足で同じ技をおこない、その後で左足で練習するといったことがおこなわれる。

以上は、マンダラー カン チービャーの技を一つの事例として、その動感と解釈を加えた民族誌的な記述の一部である。まだ修正の余地は多いが、方法論にも記述したように身体認識や身体感覚がある程度固定化すると考えられる中級者以上の経験を持つ者でなければ、時間経過の中で感覚が大きく変化してしまうので、事例として抽出される原意識の信頼性は揺らいでしまうことが明らかとなった。従来の研究が初心者の段階で止まってしまっていたのは、感覚が発生して言語化が可能になったために抽出したのであって、この先にさらなる感覚の変化が起こることを意識してこなかった可能性がある。また、こうした感覚を抽出するためには、さらなる長期的な実践が強いられるため、10年、20年といった継続的な調査が最低でも必要になることも問題なのかもしれない。今回の研究は、こうした点を乗り越えるためのものであったが、感覚の抽出にあたっては実践者たちの非常に長い、献身的な協力が必要であることもわかった。この点については、本研究にご協力いただいた実践者の方々に感謝するものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 TAKANORI ISHII	4. 巻 1
2. 論文標題 The Current Status of Anthropology of Sport in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 5th Annual Conference of the Asian Society of Sport Anthropology	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石井隆憲
2. 発表標題 民族スポーツの教材化と学習プログラムの開発 - ミャンマーのチンロンを事例として -
3. 学会等名 日本体育学会スポーツ人類学専門領域
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------